

連載 プロマネの現場から

第106回 フランク・マツラ・・・アメリカ西部フロンティアを残した男

蒼海憲治(大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

昨年末、溜まりに溜まった書籍を整理するため、家の近くにレンタルボックスを借りました。読まない本は捨てる・・・という蛮勇をふるうことができれば、ある意味簡単なのでしょうが、積読の効用を知っている身としては、さすがにそこまでの決心はつきません。そこで、納戸と化していた2部屋の本を捨てずに、かつ、スペースを空ける方法として、段ボール100箱分をレンタルボックスに移動しました。本棚の見直しの上、再度どの本を復活させるかは、これからの課題・・・いえ楽しみになります。

本の整理のコツ?!は、タイトルや中身を見ないことにつきます。いったん表紙を見て、中を開いてしまうと、本の内容や読書した当時の思い出が噴き出してきて、收拾がつかなくなります。しかしながら、数十冊は段ボールに入れずに脇に置いておくことになりました。

この脇においた本の一冊が、『写真集 フロンティアの残影—日本人松浦の撮った西部』(*1)という写真集でした。

本書、アメリカのシアトル在住の郷土史家であるジョアン・ローさんによって発見されたフランク・マツラと呼ばれた日本人カメラマンと彼が残した西部開拓時代の写真になります。

フランク・マツラは、本書が出た1983年に、テレビ朝日により、『グッバイ・フランク ～大西部の残光を写した日本人 F・松浦の謎～』と題し、風間杜夫さんが扮したドラマが放映されたのですが、それから34年経ち、再び忘れられているようですので、ここに少し紹介したいと思います。

マツラという日本人が残したフロンティアの写真・・・モノトーンの写真は、どれも西部開拓時代の雰囲気の色濃く映しており、風景も、人物も、とても味わいがあります。また、写真の下に追記されたコメントにも、ウィットがあり、思わず口元がほころびます。

いまから100年前の1903年、29歳の日本青年が、シアトルから300マイル離れたアメリカ北西部の小さな町、オカノガンへやってきます。

青年の手には、カメラと板ガラスがあった。のちに、かの地の西部開拓の終焉の記録・・・1000枚に及ぶ写真を残し、その人柄は町の誰からも尊敬され、愛された、といます。

青年の名は、フランク・S・マツラ。

本名、松浦栄・・・マツウラではなく、マツラ・サカエ。長崎県平戸松浦藩・・・マツラ党の末裔だという。松浦栄の祖父、松浦安右衛門の屋敷は、八丁堀にあり、江戸町方組（北）御当番五組に属する旗本与力であった。明治維新・・・八丁堀の屋敷は、薩長の維新勢力に取り上げられ、住居は川向こうの向島へ移る。幕臣にとって屈辱の時代・・・明治6（1873）年6月27日、東京府士族松浦安とその妻ヒデの長男として入舟町4丁目貳番地に生まれる。

明治21（1888）年11月4日、台町教会にて、木村熊二牧師により、栄は洗礼を受けます。この木村牧師、過去に彰義隊の戦いに巻き込まれ、その難を脱した後、アメリカへ渡ったという経歴があります。

「木村熊二という人は、勝海舟の下で隠密同心をやっていたという話があり、身が危険にさらされていたのでしょ」（*2）

その渡米の資金を出したのが、勝海舟であったというのも面白い話です。栄は、この木村牧師より、英語と写真技術を学びます。

用意周到。小学校の教員をしつつ、英語と写真技術を身につけた上で、1901年、20世紀のスタートの年にアメリカに向けて出発します。

当時の日本人の移民ブームとは一線を画し、シアトルやタコマの日本人社会とは、ほとんど接触を持たなかった様子です。途中、アラスカ等にも立ち寄ったようですが、1903年、オカノガンに現れます。

しかし、1904年（明治37年）、日露戦争が勃発します。その際、栄がとった行動は、『オカノガン・インディペンデント』にこう記されています。

「彼は1904年軍役に服するため日本に呼び戻された。彼は急ぎ荷物をまとめ、友人に別れを告げ、シアトルに向かったが、2週間後に戻ってきた。みんな彼の余りに早い再渡米に驚いたが、友人たちは大歓迎した。友人の1人が「フランク、もう戦争に勝ってしまったのか」、彼はいつもの調子で、「なに、船に乗り遅れてしまったのさ」と答えた。」

事実は乗り遅れたわけではなく、シアトルに着いて日本行きの船に乗りこむ直前、考え直したのだ、といます。

「自分はすでにアメリカ人ではないか、それなのにどうして日本に帰る必要があるのか・・・」

最初は、ホテルに雇われ、料理人の手伝いや洗濯人夫として働きながら、写真を取り、深夜、台所の片隅で、川から汲んできた水で、現像します。

『オカノガン・レコード紙』によると・・・

1904年6月17日

「・・・日本人写真家フランクは当地の景色を撮りまくっているが、その仕事には見るべきものがある」

1904年7月1日

「・・・我々はフランク・マツラ氏の手によってコンコナリーの自然を机の上で楽しむことが出来る。それはすぐれた作品である。フランクは我が地区の最も成功したアマチュア写真家である」

その後、写真館を開き、また、かの地の歴史的記録であるパノラマ写真を撮影します。

1907年5月、マツラと親しくなっていたウィリアム・コンプトン・ブラウン判事は、町外れの山に登り、オカノガンの町を一望できるパノラマ写真を撮る「歴史的瞬間」を体験した、といます。

また、この土地のインディアンの酋長も、白人の写真家の前には立つことはなかったのですが、マツラにだけは、自分の写真を撮らせました。コンコナリーに西部開拓民の入植が始まったのは、1886年からであり、期せずして日本人カメラマンが西部開拓の最後の時間を記録したことになります。

しかし、1908年当時のオカノガンの人口密度は、1平方マイル当り1人にすぎず、写真館が商業的に成功するのは極めて困難な状況でした。

- ・・・写真館の閉鎖。
- ・・・持病であった結核の再発。

1913年6月20日深夜、結核による咳の発作により絶命。享年39歳。

オカノガンの人々が当時の日本大使館に連絡したところ、身元不明につき、現地にて埋葬するようにとの返答でした。教会で行われた葬儀には、人種を問わない町中の人々が集まり、参列者が教会の中に入り切らないほどだった、といます。

フランクの死後、彼の仕事は、ブラウン判事によって完璧に守られました。マツラの写真の原板は、設備が不十分なところには渡さないという判事の遺志により、判事の死後、10年を経た1964年になり、ようやく発見されました。

100年以上前の日本の一青年、フランク・マツラは、単身、西部のフロンティアへ乗り込み、1000枚の写真を残しました。

現在と比べて、装備や環境がはるかに貧弱であった時代のフランク・マツラの勇気と行動力、フロンティア・スピリットとチャレンジ精神は、グローバル化が進展した現在においてこそ、学ぶべきことだと思います。

(※1) ジョアン・ロー編『写真集 フロンティアの残影—日本人松浦の撮った西部』平凡社 1983年刊

(※2) 栗原達男『フランクと呼ばれた男』情報センター出版局 1993年刊